

Title	«mystique»としてのパスカル
Author(s)	田辺, 保
Citation	大阪外国語大学学報. 15 p.185-p.207
Issue Date	1965-02-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80246">https://hdl.handle.net/11094/80246</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 《 mystique 》としてのパスカル

田 辺 保

## Pascal mystique

TANABE Tamotsu

### sommaire

「《Tout commence en mystique et finit en politique》 (Péguy). Dans cette acception de Péguy, nous voulons dire que Pascal est essentiellement 《mystique》, car il appelait toujours en témoignage ses expériences réellement vécues pour fonder bien l'authenticité de sa pensée. Toutes ses réflexions sont accompagnées de vives émotions qui y correspondent exactement. Pascal est d'une nature pathétique et émotive; et de plus, il est affligé, depuis son adolescence, d'une maladie longue et douloureuse, qui lui affecte beaucoup le caractère et lui rend la conception plus approfondie. Il a profité de ses peines et de ses douleurs pour en faire l'offrande à Dieu, et par là même, pour s'assimiler à Jésus qui souffre. Nous essayons d'étudier et d'analyser les deux documents《mystiques》, très précieux, de Pascal: *le Mémorial* et *le Mystère de Jésus*. Remarquons que dans *le Mystère*, Pascal se tourne vers Jésus en agonie, avec la crainte et le tremblement, médite sur sa Passion et avoue une pénitence sévère, la《contrition》à la manière de Saint-Cyran. Au point de vue de la communion avec notre Seigneur, on pourrait l'identifier aux grands mystiques chrétiens, comme saint Jean de la Croix, sainte Thérèse d'Avila, mais il nous semble entendre, particulièrement chez lui, un ton plus saisissant. Ne pourrions-nous supposer de là que la doctrine aussi rigoriste de Saint-Cyran ait teinté les idées de Pascal de cette 《ombre》 vertigineuse ?

## 序 論

『すべては、mystique のうちに初まり、すべては politique のうちに終る』というのは、余りにもよく知られたペギーの命題であるが<sup>(1)</sup>、かれは、この印象的な二語を用いて、的確に価値と反価値とを定義してみせた。ダニエル・アレヴィーも言うように<sup>(2)</sup>、もともと《politique》は「墮落」の別名ではなかったのであるが、ペギーにとっては、「心の張り (forces de sentiments)」の感じられないものは、なんら重んじられなかったのである。ところで、「弁証学」(apologétique)とは、もともと他に対して自己の真価を弁明するという語源的意味 (ἀπολογία—「弁護・防禦」)を持っているのであるから、その内容は、弁明の理論とテクニックを中心とするものであり、従って、何より《politique》の性質をになっていると言うことができる。歴史的に見ても、神学はこうした弁証学的性格を多分に帯びて発展してきたのであったし、キリスト教の真理性を教外の世界に対して弁護するために、常にその時代の尖端的思想等を積極的に援用し、他宗教や諸哲学との対質、聖書の宣教内容の優越についての具体的説明等を通して、自己の正統性の主張をうかび上らせることに努力してきたのであった。パスカルの「パンセ」も、その本質が「護教論」である以上、こうした弁証学的特性を濃厚に示していることは当然であり、読者を唯一の真理へとみちびこうとして作者がつくしているさまざまな文体的技巧の独創性、みごとな芸術的工夫の一面については、単に実践学・応用学の問題としてのみでも十分入念な探究にあたっていることは、既に指摘されてきたところであり<sup>(3)</sup>、事実、文体、語彙、また草稿原本の読み方、断章の配列といった分野で多くのすぐれた研究成果が発表されている通りである<sup>(4)</sup>、しかし、そうした文献学的考証、文体論的接近等のいわゆる「実証的方法」がいかに精緻をきわめてすべてを明快に解きつくすかとも見えても、真のパスカルはそこから完全にはみ出しているのである。なぜなら、パスカルの本質は何より、ペギーふうの「ミスチック」であつたからであり、個人の精神の内奥において体験され、文字通りに生きられたこの異常な「心の張り」の強さ、ゲアルディーニのいわゆる《une puissance stimulante》<sup>(5)</sup>を見逃して、「火」のパスカルはとらえることができないからである。

パスカルの頻用した用語が、17世紀の諸思想家とほとんど同種類のものであることとか<sup>(6)</sup>、かれの「パンセ」の材料が大半モンテーニュからの借用であることとかが論証されたとしても、このことは少しもパスカルの価値を貶しめるものではない。J. E. ダンジュも既に、パスカルと同時代、もしくはかれに先立つ護教論者の著作とかれの思想とを比較研究したのち結論したように<sup>(7)</sup>、パスカルの独自性と「力強さ」<sup>ビュイツサンス</sup>ははるかに他を凌駕しているのである。宗教や哲学、中でも宗教

は何より「生命の事柄」(Sache des Lebens)であるとすれば、その中核的役割を果し、かつ、究極の意味づけを与えるものとして、生きられた生命の事実、常に躍動する主体的生命体験が必ずその裏づけとして要求される。「ミスチック」とはあくまで、こうした「生ける生命意識」、  
「主体的生命意識」の強度の緊張感として把握されねばならないと言いうるであろう<sup>(9)</sup>。それゆえ護教論者としてのパスカルは、魂の深みにおいて自ら呻き求める(chercher en gémissant)パスカル、十字架上の神の苦難と内的主体的に共感しあい、自己の苦悩の霊的意味を冥想と体験のうちに祈り求めるパスカルによって、常に裏側から支えられていること、あるいははるかに超えられていることを、今一度思い起しておきたい。

かつてヘフディングは、パスカル生誕三百年の機会に「パスカルとキエルケゴール」という題でこの二人の同質的な思想家の比較対照をこころみたとがあり、<sup>(10)</sup>その気質、性格、その知的傾向、その信仰等々いくつかの項目のもとにそれぞれの特長が緻密に分析して、列挙された。しかし、このようなテーマをとり上げる場合、吉満義彦氏も言われたように、「問題はこれらの伝記的乃至思想的歴史的立場の類似対照よりは、これらの本質的キリスト者実存の正に実存者の苦悩のうちに指摘されるべき」であった<sup>(11)</sup>。そのキエルケゴールにとっては、パスカルの本質的意味は、かれの思想の独創性を計量評価したり、「パンセ」に註解を付したりする、教授たちや牧会者たちによって看過されている所の<sup>(12)</sup>、苦行者(ascète)としての姿のうちにきわまることを、日記中に記している<sup>(13)</sup>。アンチ・クリストの最大なる者と言ってよいニーチェが深くパスカルの思想に共鳴し、「わたしはパスカルをほとんど愛している」とまで告白したのも<sup>(14)</sup>、かれが自ら主体の苦悩を通して信仰の諸課題を考えぬこうとしたこと、かれにおいて宗教の弁証は個人の実存の深奥よりなされる一つの訴えであったことにもとづく。ニーチェは、キリスト教の信仰を「十字架にかけられた神」という絶対の逆説に対する戦慄の中に見ていた<sup>(15)</sup>。この戦慄感を、パスカルは自らの一身において表白しつつあったと言いうる。『弁護士が語る時には、しばしばかれの話す内容よりも、話し方によって説得しようとすることが多い。パスカルにおいて、わたしたちを引きずりこむものは、パスカルその人である。かれは、自らが燃えていたからこそ、わたしたちを燃やすのである。』<sup>(16)</sup>この「心の張り」乃至「火の熱さ」のゆえに、わたしたちは先ず、パスカルを何よりペギーふうのミスチック<sup>(17)</sup>として規定することからはじめたい。パスカルは、わたしたちを《instruire》するより先に先ず《échauffer》する<sup>(18)</sup>。成る程、かれは「パンセ」の執筆にあたり、一般の人々、特に不信者にも十分理解の行き届くように、知的・感情的面で深い配慮をもって、いわゆる『自然の光に従って』<sup>(19)</sup>できるだけ明快に・秩序立てて叙述しようとした。しかしかれの全文章の背後に、単なるポレミックやアポロジーの熱情だけではない、具体的な感動がた

えられていることを見失うべきではない。ラフユマ版「パンセ」第二部 《Notes personnelles》<sup>99</sup> に集められた断章の持っているのと同じ熱い感動の波が弁証論の部分をもひたしているのである。「パンセ」は、「メモリアル」や「イエスのミステール」との連関を離れて読むことができないのである。

ところで、ミスチックについての研究と言う場合、近代の多くの宗教心理学的立場では「様々な宗教的経験の諸現象の、病理学的側面を記述し、命名する」<sup>100</sup> だけに終ることが多い。また、用心深い偏見のゆえに、神秘主義を最初から（ブロンデルの表現によれば）「パトスとパルテモスでしかないもの」すなわち「本能の逆上する熱気、あらゆる種類の感情の錯乱が肉体の恍惚と地獄的な歓喜」をもたらしたものとしか考えられず<sup>101</sup>、その本質にひそむ内的生活の本原的な衝動力、創造性・独自性を生み出す天才の源泉を認めることができない人たちが少なくない。ここで、この小論が目ざそうとするのは、無論そうした神秘主義的現象のパスカルにおける一特殊事例の報告ではない。一人の現実の人間として、かれが個人の自発的な精神の営為によって、受難の苦悩とミステールに参与しようとした愛の「形而上的情熱の強烈さ」、そこから胚胎した apologétique 執筆への内なる衝動の意味にアクセントをおいてみようとするものである。くりかえして言うならば、ここで言うミスチックとは、ハイラーふうの「人間の人格性が分解・崩壊し、神性の無限なる一に没入する神交通の一形式」の記述ではなく<sup>102</sup>、絶対他者を前にした魂の根源的おののきを積極的に意識しつつ、これを自らの苦悩と霊的渴望の極めて鮮烈・多感な表現に託して外に表わして行く在り方の独自の形態を見定めようとするものである。また、この小論は、パスカルが抱いていたヴィジョンの特性を、その源泉との関連において明確にするため、とくにサン・シラン、アウグスチヌスよりかれが継承したイメージの性格を見きわめ、それがかれの思想にどのような、陰翳を添えているかを限定しようとする一連の小さな研究の序論的位置を占めるものである<sup>103</sup>。

スタンマンは、ミスチックとしてのパスカルが、もっとも偉大な神秘家たちにも劣らぬことを言い、かれは特に恍惚状態に陥ったり、幻影を見たりすることもなかった、むしろ完全に覚めて推論を進める冷静な幾何学者であった、ただ、かれはだれにも及びもつかぬ仕方ではイエスを知り愛の秩序に生かされていたという意味でミスチックなのだと述べている<sup>104</sup>。この「愛の眼」、独自の信仰のダイナミズムに生かされたその精神が、自己の内部に再構成しようとした世界のヴィジョンの性質を、わたしは問題としたいのである。このヴィジョン全体を一貫して流れている悲痛な調べ、深い魂の戦慄こそ、パスカルが自ら一個の生ける証人として、また、救世主の受苦に文字通りに与ろうとする苦行者として、たまたま17世紀フランスに伝えられた一つの敬虔の型を

忠実に行証し体现した所に自づと溢れ出てきたもののように思われる。わたしたちに先ず、今一度かれの生涯を特長づけている幾つかの具体的例を検討しつつ、サン・シランの霊性を受けとめたかれの精神の形成の過程とその顕著で特異な配置とを明らかにしておきたいと思う。

(註)

- 1) 《Tout commence en mystique et finit en politique. Tout commence par la mystique, par une mystique, par sa (propre) mystique et tout finit par de la politique.》(Charles Péguy : *Notre jeunesse*, in 《Oeuvres en prose 1909-1914》, Bibliothèque de la Pleiade, Gallimard, 1957, p. 516.)
- 2) Daniel Hal vy : *Péguy et les Cahiers de la Quinzaine*, Grasset, 1941, p. 194.
- 3) 拙論:「パスカルにおける imagination の問題」, 京大仏文「フランシア」第1号, 1958, p.20.
- 4) 文体・語彙については, Dom M. Jungo, J.-J. Demorest, Th. Spærri, など, textes の読みについては Z. Tourneur, L. Lafuma などの例を挙げておきたい。
- 5) Romano Guardini : *Pascal, ou le drame de la conscience chrétienne*, éd. du Seuil, 1953, p. 53.
- 6) J.-E. D'Angers : *Pascal et ses Précurseurs*, Nouvelles éditions latines, 1954, p. 214-233. cf. 《Ce qu'il montre surtout, c'est sa personnalité puissante. Elle est celle d'un dialecticien, sans doute, celle aussi d'un psychologue, mais surtout celle d'un mystique》(ibid., p. 228) .
- 7) 吉満義彦 . 「神秘主義と二十世紀思想」, 著作集第4巻, みすず書房, 昭和27年, p. 3-5.
- 8) Harald Höfding : *Pascal et Kierkegaard*, in 《Etudes sur Pascal》, Armand Colin, 1924, P.93-118.
- 9) 吉満義彦 : 「パスカルの思维の性格」, 著作集第3巻, みすず書房, 昭和24年, p.66.
- 10) François Mauriac もまた, パスカル死後三百年式典席上, 『真のパスカルの声は, フロック・コートをもとったアカデミシアンや教授たちに取り囲まれたこの豪華な儀式的の席上において聞かれるべきではなく, まさに一人の ami が ami に語りかけるような関係の中でこそ聞かれるべきである』と語っている(拙稿:「かわらぬ人間の惨めさーパスカル死後三百年ー」, 朝日新聞昭和37年7月16日, p.5参照)。
- 11) 1852年, T G, Ⅱ S. 276.
- 12) 「ブランドス宛手紙」, 1888年11月20日。

- 13) ニーチェ：「善悪の彼岸」（ⅦS.60 f.）参照。水上英広：「パスカルとニーチェ」，「仏蘭西文学研究」第1集，玄理社，昭和23年より引用。
- 14) G. Truc, *cit. in* « Blaise Pascal ou l'ordre du cœur » de C. Baudouin, Plon, 1962, p. 165.
- 15) cf. « Nous sentons sa (de Péguy) présence parmi nous. Il en est de lui, comme s'il était vivant, tant qu'il y a en lui de vertu sans cesse efficiente, qui réclame, de notre âme, adhésion. » (Daniel-Rops : *Péguy*, Plon, 1951, p. 22) .
- 16) *Pensées* fr. 283 (éd. Brunschvicg) .この語の読み方については, Cahiers de Royaumont, No 1, *Blaise Pascal, l'homme et l'oeuvre*, d. de Minuit, 1956, p. 452参照) .
- 17) *Pensées*, fr. 233.
- 18) *Pensées*, avant-propos et notes de L. Lafuma, édition intégrale, Delma, 1960, p. 334-344.
- 19) William James : *Varieties of Religious Experiences* (邦訳, 日本教文社, 昭和37年, p.13) .
- 20) Henri Srouya . *Le Mysticisme*, Que sais-je ?, 1956 (邦訳, 白水社, 昭和33年, p. 9) .
- 21) Fr. Heiler : *Die Bedeutung de Mystik für die Weltreligionen*, München, 1919, S.6.
- 22) 拙論：「異端者パスカル」，大阪外国語大学学報第13号，1963，結論 p.72参照。
- 23) Jean Steinmann : *Les trois nuits de Pascal*, Desclée de Brouwer, 1963, p. 10.

## (1)

姉ジルベルトや姪マルグリットの伝記は，嬰兒期のパスカルについて幾つかの奇妙な挿括（奇病のこと，水の恐怖，魔法使の呪い等）を伝えている。今では半ば伝説的となったこれらの物語を精神分析家や心理学者らは好個の実例として用い，パスカルの性格の *émotivité* を説明する材料にしてきた。もちろん，こうした表面的な心理学的データをいくら列記してみたところで，真のパスカルに近づくことは全く不可能であり，G.トリュクも言うように，『そこからは何もひきだせない』のであるが<sup>(1)</sup>，ともかく，かれの性格の一面として《hyperesthésie》を指摘することは何かを指示する手がかりになるのであるまいか<sup>(2)</sup>。シュヴァリエは，弁護士ドマが残した幼い日のパスカルの肖像を眺めながら，前方をひたと見すえたかれの眼に，『おどろくべき透徹感』を見てとり，『ものごとの核心にまで突き進み，素朴な驚きをもってこの核心をつかみ出そうとする眼』と評しているが<sup>(3)</sup>，この眼にはただ冷静に現実を分解して観察しようとする合理的知性の光が点じられているにすぎないと解釈してはならないのであろう。むしろ，ツールスールの挙げた，極度に強い感受性と常に焦立っている神経系が，異常なまでに冴えすまされ，直観的な透徹力と深まりを宿すこの眼をそなえしめたと考えられる<sup>(4)</sup>。こうして，パスカルは幼時より，とり分

けて烈しい感動の性質と，すぐれてパトスに向かってうち開かれた魂を一面に持って生れてきたのであった。それは，3才の時失った母アントワネットの性質を受けついたのでと言われていた<sup>(5)</sup>。

わたしたちは先ず第一に，パスカルの性格の重要な一要素をなす，この感動に向ってひらかれた精神の姿勢を見すえておきたい。かれが一つのイメージを構想する場合には，いつもそれを裏づける現実の感覚的戦慄があったということ，思想はいつも，身体的な *émotion* を伴って受けとめられ，深い共感ないし同苦の同時的体験の中で営まれていたということを覚えておきたい。純粹知性の論理的・思弁的な操作による思想の営みと異なり，生の各瞬間に起ってくる諸事態に対する主体のパトス的な感受力の強さがその特長をなしており，思想の内面的浮彫りを果していると言える。陶器の皿が音を立てているのに聞き声を立てている10才のブレーズ，また，4ピエ試験管に満たされた水銀の上部に残った空所をじっと見つめているブレーズの熱心な瞳に，わたしたちは，異常なまでに鋭敏に働くかれの感官の機能をふとうかがい知らしめられる思いがする。サン・タンジュ事件，ノエル神父との論争，さらには後期のプロヴァンシアル論争，「パリの司祭のための弁駁書」編纂などに見られる，かれの激情的な行動への献身もこうした感動の性質と無縁ではない。これを，「精神病的気質」の特性である「感激性」<sup>(6)</sup>とよめつけ，かれを《*sur-émotif*》と定義すること<sup>(7)</sup>はやさしい。しかし，この性質を生れながらにそなえた一人の個人の生涯と思索の中に展開するドラマの意味を問うことは，全く別の問題である。

もちろん，難解な幾何学上の諸課題を解いたり，整然たる物理学の論文を執筆するパスカルは，かれ自身が「もう一つの精神」と呼んだ，原理から結論へと正しく移行する知性の秩序を厳密に守っている<sup>(8)</sup>。しかし，ブランシェがかれのことを《*géomètre mystique*》と呼んだように<sup>(9)</sup>かれの内側に確立されていたこうした幾何学的秩序，論理的な配列と展開のシステムは，今一つ別な面のパスカルを決しておおいつくすことがなかった。この二つの要素ともが，かれにおいてそのまま，完全に「天才の行為」であった<sup>(10)</sup>。歯痛をこらえ乍らサイクロイドの問題を解こうと努力するパスカルの中には，必ずや凄烈な内的葛藤がひそんでいたのにちがいない。幾何学的秩序のハアモニイは，かれの内奥からかれをゆさぶりつづける感覚の現実性によって，常に破壊されようとしていたのである。しかも，かれにおいて生具のこの感動の性質は，病いという異常な経験によって，さらに一段と深まりをみせるにいたる。病気はおそらく，性的抑制と並んで個人の日常的な人格性を歪曲させ，新たな特異な内的経験へとさそう最大の契機であると言いうる。メヌ・ド・ビランやアミエルの例を挙げてもなく，パスカルにおいて病いは，かれの *pathétique* な性質にさらに一だんと痛烈な悲愴性を帯びさせるにいたった。



ジルベルトによれば、かれは、『18才の時以来、1日も苦痛なしにすごした日はなかった』位であるが<sup>10)</sup>、24—5才頃の一時期と晩年の数年間には特に重い症状に陥っていたらしくうかがわれる。ジルベルトの伝えているその記録は、読む者に戦慄感を起させるほどにすさまじく厳しい。ある意味では、『パスカルの生涯も作品も、病いに対するたえざる勝利の所産であった<sup>11)</sup>。』人並外れて過度に鋭敏な感性の持主であり、しかも反省力も精神の尊大さもだれよりすぐれていたかれにとって、わが身を厳しくさいなむ病いの鞭は、まず何より真先にまったく「不条理」として受けとめられたことであろう。ところが、かれは『この病いを勇気をもって乗り越えたばかりか、それをうたった…またとない聖讃歌の中でその苦悩をうたい上げたのだ<sup>12)</sup>。』この讃歌は「病いの善用を神に願う祈り」の一篇に表現された。崇高な「受苦」の決意、そこに洩れ出している痛みを内にたたえた言葉の烈しさ、わたしたちはそこにも、かれの内面にうずまいていたドラマの激烈さの反映をふとのぞき見るような感じがするのである。ともあれ、自然的・肉体的な身に現実に苛責なく加えられたこの逃れるすべのない「棘」に七転八倒しつつ、その苦悩の底でついにかれは『病いてそキリスト者の本来の状態』<sup>13)</sup>と極言する所にまで達し、『肉体の病いは罰にはかならず、靈魂の病いを象徴するものである』<sup>14)</sup>と告白するにいたる。この苦悩をそのままに受け容れることが、恩寵の前に虚心に自分を明け渡す被造者の本来あるべき態度とさとした時、初めてかれはこの病いが「靈の病い」を示す一つの表徴として意味をもってきたのであった。苦悩を通しての靈的平安、苦しみを経ての欣喜、弱さの中の強さ、病いの中の真の健康という、絶対的な逆説の真理性がここではっきり意識され、パスカルのヴィジョンの基本的な性格を形作る。パスカルにおける《mystique》がこの逆説の持つ緊張を背後に宿していることをあくまで注意しておきたい。ミスチック一般において、万一なんらかエロスの一体化の危険が予測される場合に、ここにおいて所造のになう根源的「破れ」と、恩寵の秩序の絶対的他者性との対立緊張が、具体的な「病い」という事実を通して、主体的体験的に意識されてきたことを忘れてはならない。この実存的対立を内面的に関連づけ、この間に「交通」を可能とする在り方こそ、人格的愛のアナログア関係であり、ミスチックとはこの緊張関係を強い自らの心の張りをもって受けとめて行く実践的態度であると言うことができる。ともあれ、パスカルは、病いという自然的な痛苦の象徴するほどの苦悩をもってになうべきものが自己の罪ないし人類の原罪一般であり、この苦難を負うて呻吟する自己の実存がそのまま十字架上の神の受難を証示するとの自覚に達し、そこでついにかの唯一の「受難」との同苦・共感、イエスとの内的関連、苦難を通しての人格的交わり、靈的交通の境地にいたったのであった。「医者も癒さない」<sup>15)</sup>本質的な病いを癒される救世主へのまったき従順と、自己の苦悩をささげて十字架上の神の受苦と一致せしめようとする完全な依拠の

姿勢こそ、パスカルが最後にたどりついた最高の極点であった。「病い」という具体的な体験が、パスカル本来の激情的性格に火をつけ、ついに神秘的イエスとの苦難による一致というミスチックの究極的経験にいざなって行ったと言えよう。

パスカルのドラマとは、相対性が一次的な自己の条件の否定を克服して、提示された新たな状況下に、二次的な相対性の場を、言うならば主体のむしろ能動的・積極的な参加によって、主体性それ自身の再確立を試みようとする営みの苛烈さを言うものであろう。ここで主体性は、相対性がより高い次元とのかかわりのもとで再び存立しうる条件を他者との共同的生の中で見出さしめられるために、先ず自己存在そのものの否定を自ら実践する決意を持たねばならない。回心後のパスカルが妹ジャックリーヌの手紙にも報告されているように<sup>90</sup>、ポール・ロワイヤルの一室で模範的な修道に励んだこと、パリ移住後も、厳しい戒律を自らに課してほとんど在俗の修道僧とも言うべき敬虔の修行にいそしんだ事実によってもうかがわれるように、かれの冥想の深さはこうした自己否定の行の痛烈さと切り離しては決して考えられないと言いうる。もちろん、この点でパスカルはカトリック教会の修道観に忠実に従ったと結論することは容易であるが、ミスチックの道の完成の対蹠点にこうした *ascétique* な訓練が必須であることを見逃してはならないし、この実践面での峻烈さに後述するかれの *«pénitence»* の強さが自らに表われていることを見逃してはならない。この自意識的な修道実践の意味は、決して「功績」目当ての被虐的修行ではなく、この地上の実存そのものを *«un jour d'exercice sur la terre»*<sup>91</sup> と見、自らのになう罪と苦難に関して *«A mesure que tu les expieras, tu les connaîtras»*<sup>92</sup> との反省に貫ぬかれていた人にとって、自己の状況そのものを自覚的に行証する必然的な在り方であったと言いうる<sup>93</sup>。こうして主体性は、否応なく自己の無をあらたにする最終的な姿勢へと、すなわち、絶対他者の恩寵を無条件に受け入れる受動の態勢へとみちびかれねばならない。被造者の本質的・基本的な在り方とは、創造主へのまったき随従、人間が固有に持つすべての精神と感覚とをあげて他者の恩寵をむかえ入れようとしてとる受動の姿勢につきる。パスカルの生涯の歩みは、この根本的被造者の姿をとるために進められてきたと言えよう。そして、以上に述べた経験と自己訓練の結果が、かれの生れながらに烈しい振幅を持つ感情の深いひだの間に、独特の「印象」を残しそれらが強烈な現実感を伴ったイメージとなって形成されて行く。常に当の主体の側において、烈しい痛みと戦慄を伴いつつ積み重ねられて行くこの生のヴィジョンの厚みの中に、この世界の根底的な矛盾そのものが次第に露呈して来、ついにパスカルにおいてわたしたちを震撼せしめる根源的な不在と指示の独自の世界像が構想されて行った。「パンセ」のヴィジョンは、作者その人のミスチックな経験と密接に関連し、これを正しく反映する。わたしたちは、このヴィジ

ン形成の途上において、この一きわ深いかげりを添えるに至った要因として、ジャンセニズムが、なにかんずくその純粋な根源であるサン・シランの教えが、なんらかの触発力として影響していないかに関心を持とうとするのである。その関係を仔細に検討する前に、パスカルのとっている精神の disposition をもう一度明確に見定めておきたいと思う。その一つの接点として、かれが残している二つの貴重な文献、かれのもっとも直接的・鮮烈な体験を記録した「メモリアル」と「イエスのミステール」の分析を試みてみることにしたい。

(註)

- 1) G. Truc : *Pascal, son temps et le nôtre*, Albin Michel, p. 16.
  - 2) L. Jerphagnon : *Le Caractère de Pascal*, P. U. F., 1962, p. 69-117.
  - 3) J. Chevalier : *Pasal*, Plon, 1922 (邦訳, 養徳社, 昭和23年, p.15) .
  - 4) Z. Tourneur . *Une Vie avec Pascal*, Vrin, 1943, p. 9.
  - 5) F. T. H. Fletcher : *Pascal and the Mystical Tradition*, Basil Blackwell, 1954, p. 2.
- Ch. Bandouin, は、むしろ弱年における母の死から受けた衝撃を問題にしている (p. 7) 。
- 6) W. James. *op. cit.*, (邦訳, p. 35) .
  - 7) R. Le Senne : *Traité de Caract rologie*, P. U. F., p. 439.
  - 8) *Pens es*, fr. 1.
  - 9) André Blanchet : *La Nuit de Feu de Blaise Pascal*, in «La Littérature et le Spirituel», Aubier, 1960, p. 36.
  - 10) F. T. H. Fletcher, *op. cit.*, p. 22.
  - 11) Gilbert Périer : *La Vie de Blaise Pascal*.
  - 12) Jean Mesnard : *Pascal, l'homme et l'oeuvre*, Boivin, 1951, p. 70.
  - 13) J. Steinmann : *Pascal*, Le Cerf, 1951, p. 233—234.
  - 14) G. Périer, *op. cit.*
  - 15) « *Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies* ».
  - 16) « *Mystère de Jésus* », *Pensées*, fr. 553.
  - 17) *Lettre de Jacqueline Pascal à Mme Périer*, le 25 janv. 1655.
  - 18) « *Le Mémorial* ».
  - 19) « *Mystère de Jésus* ».
  - 20) « *Pascal ne put grandir en profondeur sans que l'extension ne prît, dans l'organisation de son existence, un sens ascétique.* » (Frédéric Jaccard : *Blaise Pascal, défenseur de la Vérité*,

(2)

「メモリアル」と呼ばれる一枚の紙片と羊皮紙が発見された経緯は、ゲリエ第3写本<sup>(1)</sup>の中に付された註解によってもわかるように、まったく奇跡とも言ってよい出来事であった。パスカルの死後たまたま一人の召使が、故人の胴着の裏地に他の部分よりも厚くなっている所があるのに気がついたためにはかならなかった。もしこの召使に注意力が欠けていたら、この稀有の体験を伝えた紙片は永久に失われてしまったにちがいない。1654年11月23日の夜がなかったならば、パスカルのドラマはわたしたちの目に、もっと違ったふうに、おそらくはより感動の度も薄められてあらわれずにいなかったであろう。弟の死後、すべての遺稿を受け継いだジルベルト・ペリエは、この紙片の存在についてまったく知らなかったのにちがいない。少くとも、彼女の著わした伝記には、この夜のことについて全然触れられていない。スタンマンは、パスカルがおそらく、妹のジャックリーヌとポール・ロワイヤルのサンگران師とには打ち明けていたであろうと推測している<sup>(2)</sup>。この決定的回心の前後、かれがしげしげとジャックリーヌをたずね、傷ついた内心の告白をしていることは彼女の手紙によってもうかがわれるし<sup>(3)</sup>、また、この前後サンگران師の説教がかれの心に深い刻印をもたらししたことを<sup>(4)</sup>、たとえばマルグリット・ペリエなどが書きのこしているからである。この二人とブレーズの結びつきを考えるならこの想定はほぼ妥当とみなされるが、今わたしたちはその立証をすることはできない。ただ、この「メモリアル」の体験が、この他いかなる友人、縁者などにも告白しなかった程の、かれのもっとも内的な・最重要な事件であったことを見のがしてはならない。つまり、「メモリアル」は世の好奇心に訴える目的で書かれた文学作品ではなく、「心の隠れた世界に属するもの」<sup>(5)</sup>であり、しかも、「かれの霊的生涯の最高の極点」<sup>(6)</sup>として、後年のかれの敬虔の形式を決定づけた基本的体験、その心情の配置の原型がまったくあらわれているのである。

「メモリアル」はあらゆる註解を絶すると言われる。それにもかかわらず、これまで多くの人たちがその各行について詳細な考証と註解を試み、それぞれにパスカルの内奥より洩れる魂の吐露と自分の実存的心情のリズムとの響鳴を記録してきた。この「メモリアル」に面する時、人はだれでも、自分の魂をこの赤裸な根源よりの言葉一つ一つの持つ硬さと本質的な透明性の鋭さの前に否応なくさらさねばならないと言いうるのであろう。ここでパスカルは l'《ordre de charité》について、論ずるのでなく、まさにこの秩序の中に立たしめられた感激を涙を流して手ばなしで告白し、祈りそのものを直截に表現しているのである。

この夜の異様な体験が語っている最大の真実は何であろうか。まさに、パスカルが生ける神を直接に知ったということではないであろうか。わたしたちはこの事実を、先ず端的に承認することからはじめなければならない。メナアルは、この夜の体験がすでに「パンセ」執筆の動機となるほどに具体的なものであったことを指摘している<sup>(9)</sup>。この経験の現実性はその直接的・感覚的であったところにあると言いうる。「ミスチック」は本質的に、無媒介的な直接性の性格をもっている。「神と一つにされた」というその固有の条件は、「ミスチック」の *sine qua non* であると言える。超自然性が自然性とかかわり合う接点において、こうした直接性の感激がもっとも大胆に告白されねばならない。いかに合理的に、一切を明快に解きつくし、颯爽とした英姿を見せるとしても、一切の直接的交渉を拒否する「非神話化」の論理には<sup>(10)</sup>、人間がより高い次元に具体的に触れた時に感じる感動やよろこびの表明をまったく受け容れる余地がない。それは、まさに味を失った塩と言われるべきであろう。パスカルはここではっきり、神との一体化の歓喜と感激を言い表わす。正しい・「健全」な *mysticisme*<sup>(11)</sup> においては、こうした本来の直接性の生きた *émotion* の表白がかならず見出されるはずである。しかも、これと相即的にならず、より高い次元・隔絶した他者とかかわりに入れられた主体の「おそれとおのき」の感じを伴っていないとなければならない。レセジャックも、「*mysticisme* は、おそれと共にはじまる」と言っているところである<sup>(12)</sup>。そして、他者の絶対性・全能性の前に立たしめられることによって、主体がになう自然的な苦悩や痛みも、被造者が本来的に持つ「欠如」として意識され、これをおおう恩寵への深い待望と感謝の祈りとなって溢れ出すにいたるのである。

さて、「メモリアル」という呼び名に、パスカルが個人の印象を心覚えに書き留めておいただけのものを想像してはならない。これこそ、根源的「対話」であり、目に見えぬ絶対「他者」を前にした 《*dialogue mystérieux de l'âme*》 なのである。ここには人間の側からの応答だけしか聞えてこないが、その前にはまさしく、神の現存のリアリティがうかがわれる。パウロが「からだのままであったか、からだを離れてであったか…」と口ごもりながらあの稀有の体験を告白している<sup>(13)</sup> 時と同じ魂の根底を震撼させる戦慄がここにも確かに流れているからである。この現存感の確かさが「パンセ」全体を通じ、思わず読者に目まいをさそうようなリアルなイメージとなってあらわれていることに注目しておこう。あの「無限空間の永遠の沈黙」<sup>(14)</sup> にも、パスカルの感じていた「おそれ」の種類がうかがわれる<sup>(15)</sup>。それこそ、宇宙的な 《*mysterium tremendum*》 とも言うべきものであり、この感覚を背後に有しているかぎり、かれの体験を幻覚とか狂気で片付けることはできず、コンドルセのように「メモリアル」を「お守り」(*amulette*)とあざわらうことの浅薄さは<sup>(16)</sup>、一刀両断に裁かれるのである。ところで、パウロがかの恵みを与え

られたことについて、その肉体に刻印されていた「棘」を自らの痛みとしてささげたように、パスカルもまた、その生涯にわたってにないつづけた病いの苦悩によって撓められ、低められ、まさに被造者の本質的な待機と受容の姿勢をとりうることを言っておくべきであろう。この自己の「欠如」意識からこそ、恩寵への期待が生れ、その意識がひととき深まり強くなるにつれ、《grâce efficace》を求める思いは痛切になってくるのである。ともあれ、モーリヤックの言うように、「パスカルの内なる眼は苦悩の中にいたもう主なる神を見、その内なる耳は人間の忘れてはならない言葉を聞いた」<sup>99</sup>のであった。

「メモリアル」の冒頭、大きく記された「火」の文字について、トゥルヌールは、信仰の熱心を言いあらわすために当時ジャンセニストたちが用いていた一般的な術語にすぎぬと述べ<sup>100</sup>、H.F. スチュアートは、詩篇39：3の、「わたしの心はわたしのうちに熱し、思いつづけるほどに火が燃えた」をふまえていると指摘しているが<sup>101</sup>、わたしはやはり、スタンマンも言うように、「火」の文字は「神」に対応するものと率直に見ておきたい<sup>102</sup>。「メモリアル」の羊皮紙コピーの方には、《FEV》と大文字で書かれ、その8行下には《DIEV》の文字が同じく大文字で出ており、この2語はパスカルの意識において確かに照応し合っていたものとみなされる。当夜書かれた「メモリアル」のオリジナルの方には、聖句の引用箇所についての指示は一切付されていない。H. ゲーイエは、この夜の体験が聖書を冥想していた最中に起ったものであることを考証しているが<sup>103</sup>、シルベルトも述べているように、すべての聖句をそらんじていたかれにとって、《FEV》として迫ってきた神が、聖書の中に啓示された神にはかならないとの意識は当然疑うべからざるものであったにちがいない。とにかく、この《FEV》の一語こそ、「メモリアル」をミステック文獻として決定づけるものであるが、この神の実在感覚の確かさが《Dieu sensible au cœur》と言われた意味におけるまさに《cœur》に感じられた神であり、——《sentiment》の一語はこの意味である、——それがよろこびと平安（《joie, paix》）に達して行くことによってこの経験の正当性が明瞭に証される。ここで《sentiment》による《certitude》のよろこびが中心テーマをなしていること、しかもこのよろこびが恩寵の決定的な証拠として受けとめられていることに注意しておこう。《grâce efficace》の第一のあらわれがよろこびであることはサン・シランも言う通り<sup>104</sup>、イエス・キリストの神が確実に自己とのかかわりの中に入られたとの感じは、パスカルにおいて実に「よろこびの涙」とまで表現される圧倒的な幸福感となって溢れ出ているのである。ルツ記の引用は、「汝の神、かなたの神」であった対象が、「自分の神—わたしの神」となって現実に生きたもうとの信仰告白を含む。冒頭の「火」から、この「よろこびの涙」にいたる各行は、かくして、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」——聖書中

に自己を啓示された神が自分自身の神となりたもうたという<sup>80</sup>，とどまるを知らぬ歓喜の表明であると言えよう。

次いで、語調は一変して、次の4行はこの神から離れていたことの反省となる。フレッチャーは、「メモリアル」においてもっとも顕著に出される特長として、「神秘的合一」を示す言葉の例にこの箇所を挙げている<sup>81</sup>。パスカルは神と分離状態にあった自分が、再び神との決定的な結びつきの中に入れられた今、もはや二度と神を失うまいとの願望とおそれとをこめて、この4行を記したのであった。神を真に知らない時には、神との分離もそれ程痛切に意識に上ってこないが、生ける神の現存に触れて初めて、パスカルは神と離れることの不安におびえるのである。この不安こそ、グアルディニのいわゆる《le tragique de l'amour》としての不安であり<sup>82</sup>、パスカルのイメージにあの暗さ・深淵への恐怖のおののきを添えしめた原因となったと言いうる。ここには、「離れる」(être séparé) とか「捨てる」(quitter) とかいった語が反復して用いられ、「メモリアル」の主調音をなす歓喜の調べの中にも、底流のように不安とおそれの悲痛な調子がひびいているのである。アヴェの引用している一言によればパスカルは「至高の幸いは神を知り、神と永遠に一つであることである」と記していたそうである<sup>83</sup>。この神との強い一体感の裏返しだが、神との分離に対する深い恐怖を呼びさまし、メモリアル的一句「永遠に神から離れることのないように」との切なる祈りとなってほとばしり出る。ダニエル・師は、この「永遠に」(éternellement) という語にこめられたパスカルの深い魂のおののきをうかがえると言っているが<sup>84</sup>、わたしたちはまた、かれが臨終間際に最後に残した言葉《Que Dieu m'abandonne jamais!》を思いおこしてみることもできるであろう。パスカルの一生を通じて、こうした戦慄感が最後まで支配していたのであり、これこそアウグスチヌスの《In manus tuas commendo spiritum meum.》をそのまま受けついだものであり、また、最後の瞬間まで《grâce efficace》の外に捨てられまいとする、サン・シラン＝ジャンセニスト的なおそれの感情にひたされていると言えよう。「メモリアル」というもっとも典型的な神秘体験のただ中に、この悲痛なトーンが鳴りひびいていることに注意しておきたい。

ところで、スタンマンはこの部分を最後まで引きのばしてイエス・キリストの受難に関する冥想であるとしており<sup>85</sup>、ブレモンは更にこの5行前のマタイ27:46の引用以下を「熱情ほとばしる反省の祈り」として一括しているが<sup>86</sup>、わたしは一応、この4行を別にし、引用されたヨハネ17:3の聖句以下に至ってイエス・キリストへの接近がなされていると考えた方がよいと思う。この聖句の引用によって、初めて、生ける神を知ることとはその神のつかわれたイエス・キリストを知ることと切り離せないことが告白され、次いでイエスの受難が自己ともっとも深いかわりを

もつことが言い表わされる。ここで、イエスの受難が何より自己自身が直々にあずかっている所業であると認識され、イエスの受難との一体感、いわゆる「イエス・ミスチック」が明白な形で示されるのである。パスカルにおける神秘体験において、子なる神イエスが特に重要な位置を占めているのに注目しておこう。これはベリユルにも通じるキリスト中心的伝統につらなるものであるが、何よりパスカル個人の体験的事実として表白されたものであることは言うまでもない。こうして、「メモリアル」は「パンセ」の中に結晶した「イエスのミステール」の序奏をはるかに奏でているのであるが、かれが自己の一身になつた苦難をささげてイエスの受難との一体感・共感を告白するまでにいたるのは、さらに後のことである。ここではただ、神を知ったよろこびの中で、まったく神への依拠の姿勢が言い表わされることによって終る。ミスチックの究極は、まったく自己を無にして神の前に完全な自己放棄を果すことである。オリジナルの最後の一行は《Renonciation totale et douce》で閉じられ、コピイの末尾にはさらに3行が追加されているが、この3行については疑問多く、後年書き添えられたものという説明が多い。しかし、自己の無化から《Soumission……》の告白まではもう一歩であり、わたしたちはただここで、かれの完全な謙虚と自己卑下の最終的な姿勢に<sup>64</sup>、神の現存の逆説的な指示をうかがえば足りる。プティトはベッドに横たわるパスカルを想像しているが、わたしたちはブランシェと共に、ひざまづいて祈るパスカルの姿をここに思いえがくべきであらう<sup>65</sup>。

#### (註)

- 1) Bibliothèque Nationale, fonds fr., 13913. cf. *Opuscules et Lettres de Pascal*, avec biographie et notes de L. Lafuma, Aubier, 1955, p. 69—72.
- 2) J. Steinmann : *Les trois nuits de Pascal*, *op. cit.*, p. 31.
- 3) *Lettre de Jacqueline à Mme Périer*, 1e 25 janv. 1655.
- 4) パスカルがサングラン師の説教にうたれたのは1654年12月4日という説もあるが、聖母奉獻日(11月12日)であったとも言われる。
- 5) J. Daniellou : *La nuit de Pascal*, in 《La Table Ronde》, No 171, avr. 1962, p.12.
- 6) F. T. H. Fletcher, *op. cit.*, p.235.
- 7) J. Mesnard : *Les conversions de Pascal*, in 《Cahiers de Royaumont》, No 1, *op. cit.*, p.67.
- 8) cf. Rudolf Bultmann : *Jesus Christ and Mythology*, Charles Scribner's Sons, 1958, chap. 5.



- 9) 北森嘉藏：「神の痛みの神学」，新教出版社，昭和22年，第6章「痛みの神秘主義」，p.85-87.
- 10) Ric' jac : *Fondements de la Connaissance mystique*, cit. in. F. T. H. Fletcher, *op. cit.*, p.124.
- 11) コリント人への第2の手紙12 : 1-10.
- 12) *Pensées*, fr. 206.
- 13) cf. «Les plus saints doivent toujours demeurer dans la crainte et dans le tremblement, quoiqu' ils ne se sentent coupables en aucunes choses. » (Ve Provinciale)
- 14) cf. F. Lélou : *L'amulette de Pascal*, Paris, 1846. cf. « Aussi bien le meilleur, le plus éloquent commentaire du Mémorial,— que la vulgarité morale du XVIII<sup>e</sup> siècle a si pauvrement raillé,—n'est-ce pas toute la vie et toute l'œuvre de Pascal après sa conversion? » (V. Giraud : *La vie héroïque de Blaise Pascal*, Cres, 1923, p.88) .
- 15) François Mauriac : *Blaise Pascal et sa sœur Jacqueline*, Hachette, 1931, p.147.
- 16) Z. Tourneur : *Pensées*, Ed. de Cluny, 1938, préface.
- 17) H. F. Stewart : *Holiness of Pascal*.
- 18) J. Steinmann : *Les trois nuits de Pascal*, *op. cit.*, p.31.
- 19) Henri Gouhier : *Le «Mémorial» est-il un texte mystique?*, in «Cahiers de Royaumont» No 1, *op. cit.* ,p. 326.
- 20) «La paix et la joie secrètes sont les premiers effets de la grâce» (Saint-Cyran : *Lettres spirituelles et chrétiennes*, t. 1,p.451.
- 21) A. Blanchet, *op. cit.*, p.22-26 にも，この言葉が旧約聖書のモーセの「火」と関連を持つことが論証されている。
- 22) F. T. H. Fletcher, *op. cit.*, p.20.
- 23) R.Guardini, *op. cit.*, p.18.
- 24) cit. in F. T. H. Fletcher, *op. cit.*, p.20.
- 25) J. Daniélou, *op. cit.*, p.17.
- 26) J. Steinmann : *Les trois nuits de Pascal*, *op. cit.*, p.32.
- 27) Henri Brémond : *Histoire littéraire du sentiment religieux en France*, Bloud et Gay, 1925, t. 4, p.356.
- 28) Saint-Cyran : *De la grâce* 中に，「rabaïsser」の語が見られる。
- 29) A.Blanchet : *op. cit.*, p.19.

### (3)

「イエスのミステール」の夜は、「メモリアル」の夜と連続している、とスタンマンは言う<sup>(4)</sup>。ゲッセマネの園のイエスを冥想しつつ、パスカルが一語一語心をこめて書きとどめたと言われる、この稀有の一篇の夜はどのような夜であったのだろうか。フォージェールも言うように、「この数ページは、まったく *mystique* な性格において顕著」であり<sup>(5)</sup>、特にかれの内なる心のふるえがそのまま脈打っているような熱っぽさを持っており、文体も自らにアレクサンドラン、内的リズムをそなえて、一篇の詩に似たたくまざる調べを帯びているようである。もちろん、パスカルの立っていた点は、いわゆる詩的立場、「詩人的実存」ではなく、厳密にリアルな一点であった。しかし、おそらくかれは、孤独な密室の祈りにすくずうち、自ら内に湧いて出てくる衝動にうながされるままに、一つ一つの言葉を自分の肉体において反芻しつつ書きとめて行ったのであろう。colère, supplice, tourment, douleur, ennui, abandon, horreur, agonie…といった、じかに感情の溢れ出しているような、極度に現実の重みをたたえた用語がくりかえし用いられているのに注意しよう。しかし、ここには、「メモリアル」の場合のように、一瞬の激情につき動かされて、ふるえる手でペンを取った時のような、切迫した調子は見られないようである<sup>(6)</sup>。「イエスのミステール」には、もう少し落ち着いた、魂の深みからの静かな祈りのつぶやきとも言えるべき、平安と静謐が全篇に漂っているように思われる。多分、さしものに跳梁をきわめた病いも一時その勢いをとどめ、小康状態にあったのかもしれない。苦悩に身悶えしているような病者の祈りの烈しい調子はここにはなく、胸の奥底に苦悩の余燼はなおくすぶりつづけているとしても、ようやく与えられた「新しい光」<sup>(7)</sup>の中を歩もうとする人の安らぎと慰めの思いが仄かに流れているような気がする。

「イエスのミステール」もまた一つの対話である。パスカルははっきりと目覚めて、苦難の中のイエスの姿を注視している。《Je crois ..., Ce me semble...》といった、客観的な評価と判断を示す句がちりばめられているのに目を留めよう。苦しみの中のイエスに対し明らかな自覚ないし自意識を持った自己が、その共感と決意を表明するのである。これは、自己を滅却して神秘的イエスの中に融合しようとする直接性のミスチズムではなく、自ら冷静な目で孤独と悲哀の中のイエスを見つめ、そこに自らの独自の体験を表白して行く、いわばアクチヴな・意識的なミスチックとも言われるべきものであろう。ここでパスカルが、完全な自意識的決断の上に立って、イエスを客観視し、その悲痛との同苦を果そうとしている姿勢に注目しておきたい。弟子たちみなが眠りこけている中で、ただ一人目ざめて祈るイエスと、暗夜孤独な冥想と祈りに傾倒するパスカルとが、一対一の人格的關係の中に、まったく苦悩のコミュニオンを果すのである。

ジャカル氏の言われるように「17世紀と1世紀が、ゲッセマネとポール・ロワイヤルが、互いに重なり合った」<sup>(9)</sup>のである。こうして自らの苦悩と分裂をとおして、キリスト教の最大の逆説、救世主の受難を証しようとするパトスこそ、パスカルのものであり、血しぶくような「イエスのミステール」の一語一語に、まさしく「真のパスカル<sup>(10)</sup>」がミスチックの最深奥の体験の記録が見出されると言えよう。

「ミステール」は仔細に読み直してみると、ほぼ3つの部分に分けることができる。第1は、ゲッセマネのイエスの苦痛に深く参入し、その意味と本質を自らの最も深い体験において追体験しようとする部分であり、第2は、この苦悩の中にあつて、イエスが直接人類に向つて御自身の内なる苦衷を会話体で語られる部分である。この声を、パスカルは自らその内心において、自己の同苦の体験の中で聞いていたにちがいない。最後の数節は、パスカル自身の誓いないし告白ともいうべき個所であり、イエスの呼びかけに対し信仰告白と証言とをささげている部分である。この3段階の経過に注意しつつ、「ミステール」を最初から読み返してみる時、一語一語を記す作者の思いが次第に高潮し、文章もそれに即応した内的リズムを帯びて行くのをうかがうことができる。パスカルは最初、まったく孤独の中にいたもうイエスの姿を凝視しようとした。そこにはおそらく、ポール・ロワイヤルに吹き荒ぶ迫害の嵐のさ中、否応なく孤立せしめられ、神の御前にひとり抵抗する者として立たしめられたかれ自身の危機的状況が反映していると思われる。《Jésus est seul sur la terre..., Jésus ... dans un des supplices, Jésus sera en agonie..., Jesus... au milieu de ce délaissement universel..., Jésus dans l'ennui..., Jésus... dans les plus grandes peines ...》等々、この異様なまでに孤独と苦悩の限界状況において規定されたイエスの姿に、わたしたちはパスカルの烈しい内的苦闘を読みとるべきであろう。この絶対的な悲哀と孤立の中で、かれは神への唯一の接近の道が、ついに自分一人になることにおいてきわまることを告白する(《On mourra seul...》)<sup>(11)</sup>。《Il faut s'arracher de ses plus proches et des plus intimes.》という言葉の中にも、かれの自己放棄と献身の烈しさがうかがい知られる<sup>(12)</sup>。こうして、神との一体感の中で、神意へのまったく随順が言い表わされるのである。「メモリアル」の《Soumission totale et douce à Jésus-Christ》は、「ミステール」のこの部分につらなるはずの言葉であつた。ゲッセマネのイエスの苦難に、こうして底の底まで共感し切った途端、イエスからの応答がひびいてきたのである。これが第2部であり、パスカルは自らの苦しみを捧げて受難のイエスを必死の目ざしで見つめつづけてきたが、ついにその果てに、かなたよりの御声によって突然転回せしめられ、恩寵の働きを如実に感じて感謝の涙にくれることになる。イエスの死の理由が自己の苦難ないし、人間の本質的痕

敗そのものと密接にかかわり合っていることを知らしめられ、《Tu mourras à la fin... Mais c'est moi qui guéris...et rends le corps immortel...》と語られるイエスが「友人よりももっと近い友人」であることの意味の大きさにうたれ、イエスへの愛の衝迫のままに、《Seigneur, je vous donne tout.》と叫ぶのである。最後にかれは、「わたしの傷をかれの傷に加え、わたしをかれに結びつけねばならない」と書いているが、この言葉こそ、パスカルの真の願いが自己の苦悩を通してするイエスとのコミュニオン、イエスの受苦との同苦いいわゆる「イエス・ミステック」と言われる心的態度を旨とするものであったことが明らかである。なお、パスカルの聖餐観が正統的カトリックの教義に忠実に従っていながら、何よりそのリアルな実在を強調した点に<sup>90</sup>、神祕的イエスとの交わりにこそかれの目標があったことを想像しうる。多くのすぐれた神祕家たち、たとえば十字架の聖ヨハネにも幼きイエズスのテレシアにも、主との同苦を通じてその受難の秘義に迫ろうとする態度は見られるのであるが、パスカルにおいてもまた、こうした神祕家たちに劣らず、受難の意味に内的に迫ろうとする精神のあり方が見出されるのである。ただ、パスカルにおいて、わたしたちは特に、ボーゲンが「何かしら烈しいもの・悲痛なもの」と言ったあの調子<sup>91</sup>、暗夜にすさぶ嵐に似た痛切な一つのトーンに気づかずにはおれないのである。

ここには、たとえば、十字架の聖ヨハネの「霊の暗夜」(la Noche obscura) に感じられるような、ほとんど自然的ともみえる愛のdouceurをうかがうことはできない。もちろん、十字架の聖ヨハネにおいても、甘美で安易な自然の道をたどることがその神祕的修行の方向ではなく、上述したように苦しみを通じて主との交わりを実現しようとする願いは度々もらされているのであるが、その《Poèmes mystiques》<sup>92</sup>などを一読しても、たとえば花婿と花嫁の愛の対話などまでが比喩として用いられており、自然的・感覚的な愛がアナログアとして豊富に利用される程親密なものであったことが考えられる。しかし、パスカルにおいては、こうした愛の直接性・感覚性は厳しく拒絶されており、神の前にひざまづく主体の姿勢には厳密な自己統御が自らに課され、たとえば「メモリアル」に見られた率直なよろこびの表明すらも「ミステール」ではまったく消えている程に、痛切な峻厳な一つの精神の凍性が明らかに看取される。パスカルのイエスは、「甘美な浄配」でなく、「かれは苦しむことを教えられた」<sup>93</sup>と告白される程に、徹底的に打たれ苦しめられた「主の僕」であった。このイエス像を見ることができたということこそ、逆説的にかれの内心の苦痛と「呻き」を示唆する。「ミステール」の最後の言葉が《Fais donc pénitence pour tes péchés cachés.》であったことにも注意したい。かれはここまで自らの苦悩を主体的・体験的に真理を把握する衝迫力、受肉の秘義を自らが「象徴」となることによって証示する道具とし

て捧げることにより、墮落の深刻さをこの痛烈な「ミステック」告白として表現したのであった。その背後には、自己を含めて人類の罪に震慄せしめられる凄烈な「悔悛」を言い表わす魂の姿勢がある。ここでわたしは、サン・シランが拠り所としたという《contrition》の立場を思い起すのである<sup>(4)</sup>。

(註)

1) J. Steinmann : *Les trois nuits de Pascal*, *op. cit.*, p.52.

2) Faugère, *cit. in* F. T. H. Fletcher, *op.cit.*, p.27.

3) Marcel Raymond は、「ミステール」は「メモリアル」に、「その調子<sup>トーン</sup>において隣り合うもの」と考え、1655年1月2日以前、おそらく1654年12月前半に書かれたものと推定しているが、この意見は妥当ではない (cf. H. Bardouin, *op. cit.*, p. 75—76)。やはり、メナアルやラフュマの言うように、その調子の高さから見て晩年のものとする方がよいと思われる。

4) *Pensées*, fr. 337.

5) F. Jaccard : *Blaise Pascal, défenseur de la Vérité*, *op. cit.*, p. 151.

6) 《Où trouver vraiment Pascal ? Dans le *Mystère de Jésus*. Ces paroles qu' il faut citer toujours, si connues soient-elles, ne sentez-vous pas passer en elles la même secrète vertu qui atteste en le moindre mot des mystiques l'action de leur Maître ? Le vrai, le plus vrai Pascal est celui du *Mystère de Jésus*.》 (Jacques Maritain : *Réflexions sur l'intelligence*, Paris, 1924, p. 142) .

7) *Pensées*, fr. 211.

8) cf. 《Il (Blaise) faisait voir qu'il n'avait aucune attache pour ceux qu'il aimait... il avait écrit : Il est injuste qu'on s'attache à moi..., car je ne suis la fin de personne.》 (Gilberte Périer : *Vie de Blaise Pascal*) .

9) cf. *Lettres à Melle Roannez*, 4, 6 .

10) 《...on ne sait quoi de violent et de triste dont on se sent gêné...》 (E. Baudin : *La Philosophie de Pascal*, éd la Baconnière, 1947, t. 2, p. 104) .

11) St Jean de la Croix : *Poèmes Mystiques*, version française de Benoit Lavaud, collection des cahiers du Rhône, éd. la Baconnière, 1951.

12) F. Jaccard : *Blaise Pascal, défenseur de la Vérité*, p. 155.

13) attrition と contrition とは、もともと「罪の悔悛、罪の嫌悪」の意味で同意語であったが、聖トマスにおいて既に区別されていて、attrition がなお十分自己から脱却し切っていない愛情、おそれを交えた自

己愛から生ずるのに対し、contrition は、愛 (caritas) によって完成される悔改のありかたと考えられていた。サン・シランは、この contrition の立場こそ真の立場であると信じ、極度に rigoriste な主張をした。

## 結 論

パスカルがサン・シランの読書によって受けた影響を正確に限定するのは、さらに精細な研究を必要とするが、今わたしはジャカル氏によって次の諸点を指摘しておきたい<sup>(1)</sup>。

カルヴァン派宗教改革に対立して起った反宗教改革においては、何より感覚的なものの聖化に全力がそそがれた。純粋なカトリック的環境においては、たとえば、スペインのテレサのカルメル会にしろ、フランソワ・ド・サールにしろ、感情の昂揚と献身の歓喜によって神にたどりつく道が何より一義的に強調された。しかし、「受肉」の秘義以外に神と人間をつなぐ道を一切否定したのが、サン・シランの示した峻厳な狭い道であった。ポール・ロワイアル修道院では、祭壇は極度に質素なものにまで押しつめられ、情念の奔出は厳しく統御された<sup>(2)</sup>。奇跡や幻覚に対する批判も厳正であったと言われる。要するに、サン・シランの独自性は、強固なゆるがぬ fermeté、感覚的な一切の偶然性の放棄、唯一のリアルな存在の超越性への依拠、有効なる恩寵といったものであった。パスカルにおいて、わたしたちは、感情の要素がどれほどまで重大視され、また、その性格と生涯を決定づける動因として働いてきたかを知っている。しかし、このサン・シランとの邂逅によって、かれは自然的・感覚的な次元の感情の世界を超え、より超越的な立場との関連において発言することができるようになった。パスカルが同じポール・ロワイアルに所属した人々の中でも、アルノーやニコルのような esprits raisonnables よりも、サン・シラン、サングラン、サシ、バルコスといった人々の spirituel な流れを掬んでいるといわれるのも、単なる合理的知性の判断による推論や直接的な感情体験よりも、絶対他者を前にした魂の鋭い緊張感と強い道徳的感覚に支えられた精神の型に属しているからである。いわば、サン・シランによって、パスカルは immanentisme の立場を離れ、transcendanceの立場に至ったのだとされる。いわば、「かなたの神」を前にした深い魂の慄えを感じるようになったと言いうるのである。この精神の型こそ、パスカルを純粋カトリック神学者の思考のパターンと明確に分つ一点であり、むしろ『問題の厳肅さ、断言内容の明確な把握、外的事情を顧慮しないこと』<sup>(3)</sup> という抵抗の精神に一歩近づけるにいたった本質であろうと考えられる。この厳正な態度と、変革のヴァイタリティを生み出す根源への回帰の情熱と<sup>(4)</sup>、豊饒な倫理的実践力を伴う「ミステック」としての内燃する精神の dynamisme こそ、パスカルを、サン・シランから遠くアウグスチヌスにまで遡る精神の系

譜の中に位置づけるものであろう。フレッチャーが、「パスカルは その特異な体験と生活の聖さのゆえに、真のキリスト教神秘主義の伝統に属する」<sup>(6)</sup> と言うのも、この意味においてであろう。

さて、わたしたちは、かれの性格と生涯について、その一つ一つのモメントの示す意味をもう一度かえりみ、さらに「メモリアル」と「イエスのミステール」という二つの文献にもとづいてかれの mysticisme の性質を限定してきた。かれの作品のすべてはこの体験に裏づけられ、事柄そのもののもたらすこの迫真性を内在している。画心前、社交生活のむなしさの中で自己の存在の absence を痛いように感じていたパスカルが<sup>(6)</sup>、11月23日の夜以後、<sup>プレニチュード</sup>「充実」の現実性をも強く実感するにいたった。この「メモリアル」における絶対者の実在感の確かさは、「ミステール」の段階に至り、苦悩を通じてする他者との霊的交わりの域に達したのであった。パスカルがここまで神秘的体験を深めることができたのは、その身に負うた苦悩の太いさであると共に、かれ自身が一個の苦行者として自発的 積極 的な自己修練と厳しい実践を重ねて行ったためであることは言うまでもない。パスカルにおける「ミスティック」の要素は、何よりこの神秘的イエスとの霊的交通にきわまるのであり、受肉と贖罪の意味に関して自ら共感し同苦することにより、救世主の糾意にあずかろうとする強烈な内的訓練の実践力こそ、かれのいわゆる「ドラマ」の本質をなすものといえよう。パスカルに面する時、わたしが常に覚えざらぬあの独自の毅然たる風貌は実にこの所に原因を持っているのである。この精神を築き上げた sources はもちろん、第一に聖書によって教えられたイメージであり、聖書にもとずいてくりかえされた冥想であることは言うまでもない。しかし、パスカルがその生涯においてふと交錯した一つの精神が、この所で顕著な類型を示し、同じトーンを奏でていることを、わたしたちは 見逃すことができない。病苦の桎梏の中で苦悩の意味を沈思するパスカルの精神は、必ずやどこかで、ヴァンセンヌの石の獄舎の床で祈るその人、サン・シランことジャン・デュヴェルジェ・ド・オラーヌの精神と共鳴し合ってきたはずなのである。サン・シランとの出会いが、パスカルにこの深みへの開眼を契機づけたと想像することはできないであろうか。わたしの次の課題は、サン・シランの諸命題が、どの地点においてパスカルの求道の道筋と交わり、これにどのような翳りを添え、その精神の軌跡をどのように導いて行ったかをより仔細に見究めることになるであろう。

(註)

- 1) F. Jaccard : *Saint-Cyran, précurseur de Pascal*, *op. cit.* p. 302—310.
- 2) *ibid.*, p. 305. cf. « Ainsi le veut la doctrine de Port-Royal : le tout de l'homme, c'est son néant devant Dieu, mais ce néant joint à J. sus-Christ, devient lui-même infini... » (F. Jaccard : *Blaise Pascal*..., *op. cit.*, p. 155) .
- 3) カルヴァン : 「信仰の手引き」 (邦訳, 新教出版社, 昭和31年, p. 127) .
- 4) « ... la mystique au contraire, est réfractaire à la socialisation, à l'objectivation... La mystique est liée à la spiritualité ... La mystique est l'éveil de l'esprit dans l'homme, qui perçoit mieux alors le réel et de façon plus profonde que l'homme naturel ou simplement psychique. *La mystique est une victoire sur l'état de créature*... » (Nicolas Berdiaeff : *Esprit et Réalité*, Aubier, 1943, pp. 163,165) .
- 5) F. T. H. Flecher, *op. cit.*, p. 151.
- 6) 拙論 : 「パスカルにおける absence の意味」, 京大仏文「フランシア」第3号, 1959.
- 7) その時期は, おそらく1645—49年頃, パスカルが第1の回心後さかんにその手紙を読みはじめた時とみなされる (H. Gouhier, *cit. in* « Pascal présent », G. de Bussac, 1962) .

(Le 30 septembre 1964).